

八丈島の「かっぺた織」に関する先行研究 調査：技法の保存と継承に向けて

井坂弥生

はじめに

東京都の伊豆諸島の最も南に位置する八丈島には、「かっぺた織¹」と命名されている手織り技術によって織られた織物がある。八丈島は、植物染料で黄・樺・黒色に染めた糸で織った「黄八丈」と呼ばれる絹織物の生産地として有名で、かっぺた織は多くの場合、この絹織物と同じ糸を用いて織られてきた。かっぺた織は、1962（昭和37）年3月30日に、文化財保護委員会によって、玉置びんを技術保持者として「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」に選択された手織りの技術²である。かっぺた織の名称は、文化財保護委員会が命名³したものとされ、この時点においても人から人への伝承の危機に瀕していた手織り技術である。記録作成等の措置を講ずべき無形文化財の選択によって記録が作成されたとされている。

これまで、この織物や手織りの技術については、様々な観点、専門分野から研究が行われてきた。

記録作成等の措置を講ずべき無形文化財選択以前から、近代以降、腰機で複雑な織り方をして幾何学紋様を織り出す、珍しい織物として、幾人もの研究者が研究の対象とし、民藝・民具・民俗・文化人類学・史学・地誌等、それぞれの分野で研究が行われてきていたものの、情報は各分野に分散しており、分野を横断し、一冊の本や一本の映像資料で、かっぺた織の全体像を把握できるものが確認できていない。また、現在も島内で、数名がこの手織り技術を理解しており、実物の織物や織機を保存し、来島者に展示や説明を行ってきたが、2022年時点で、商品、作品のいずれにおいても、新作の発表は久しく行われていない。過去には島内で、技術を習得していた方が教室を開くなど、継承活動を行っていたとされているが、現在は織り方を教える活動は行われていない。

また技法保存の視点からみると、どんなに複雑な組織であろうと、布は織りのための技術書があれば「複製」や「模して織る」ことができる。人から人へ

の伝承だけでなく、技術書があり、一定の織り技術に習熟した織り手であれば、当地において同一の材料と技法を用いた「複製」が製織できる。加えて、産地外では似た糸を用いて同じ組織を織る「模製」⁴が可能な状態が最良といえる。これらいずれであっても技法が消滅する危機的な状況は回避できていると考えることができる。

しかし現時点でかっぺた織は、そのような状況にはない。複製や模製が困難になった場合、さらに膨大な時間と労力をかけて復元を行わなければならない。そうした復元ほどの労力を要しない時点で、資料が整理され、織物技法に関わる情報が統合されることは、社会的・経済的にも価値を有するものと考えられる。

本研究は、これまでのかっぺた織の先行研究を網羅的に収集し、整理を試みるとともに、現地調査を加えることで、地域固有の織物文化の価値を明らかにしたいと考えている。本来、帯や紐は衣生活における実用品であり、博物館で遠くから見るものではなく、その手触りや使用感も、全てがその織物の特徴を形成する要素であると考えられる。このため、文献研究、現地調査において得られた情報を元に、その詳細な技法を明らかにし、手に取れる資料を作ること、染織文化を立体的に捉え直す機会としたい。

本稿は、その第一段階として、また、感染症対策のため現地調査が大きく制約を受けているため、先行研究の網羅的調査を行い、研究史の全体像を明らかにする。

第一章 かっぺた織の定義と現状

第一節 かっぺた織とは何か

「かっぺた織」は、文化財保護委員会によって「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」に選択され、選択後、東京国立博物館が中心となって技術の保存が行われ、資料が作成されたとされている。ただし、映像資料は作成されなかったとされている⁵。かっぺた織機と織布（図1、2）を別に示す。

「国指定文化財等データベース」によれば、次の①～④の特徴を有した八丈島に伝わる工芸技術である⁶とされている。

①「非常に古風」で「織機として組み立てない」織り道具を用いるという特徴

織物は多くの場合、機台のある高機⁷や地機⁸で織られている。しかし、かっぺた織には機台はなく、織道具を取り付けた経糸の一方を柱に括り付け、後帯で経糸に張力をかけ、中筒と綜紵で経糸を操作して開口し、緯糸を入れて打ち込む腰機⁹で製織され

る。腰機は人類の原初の機織りの形態を残す手織り技術であるとされている。日本国内に現存している腰機は、かっぺた織のほかには、北海道に伝わるアイヌ民族のアットゥシ織、沖縄県の石川伊波メンサー織の2つ¹⁰で、その中でも、かっぺた織は、二重組織を織っている国内唯一の腰機織りであるという特徴を有している。

日本においては、古代に原始機（腰機）で製織が行われていたと考えられており、地機、高機が古墳時代に伝来したことによって、原始機は6～7世紀頃に途絶えたと考えられている¹¹。腰機のことを「非常に古風」とであると表現したのは、同じく機台のない機を、地機、高機の伝来前にあった機の形と同じであると説明することを意図していると考え

②「風通様の二重織り」の紋織りの帯という特徴

組織織の名称は「風通様の二重織り」という説明のほかには、「経畝二重組織」¹²、「二重平織」など、研究者によって説明が異なり、記録作成等の措置を講ずべき無形文化財選択後も統一されていない。風通織、二重織、経畝織、平織はそれぞれ独立した織り組織の名称で、それらを組み合わせてこの織物を表現しようと試みていると考える。

③「幾何学文様」を織るという特徴

模様はソロバン、十字、タケノコ、ヤマミチ、イチマツ¹³などと呼ばれている幾何学模様が織り出されている。

④幅4センチくらいまでの紐状の織物という特徴

かっぺた織と命名される以前は、八丈島では「真田織」¹⁴と呼ばれ、織られた紐を「サナダ」や「真田紐」と呼ぶ。または、特に固有名詞を用いずに、かっぺた織の技法で織られたものも、一重の真田織も、伊達締めに使っていれば伊達締めと呼び、帯に用いていれば綾帯、紐状のものは轡や紐とも呼んでいた様子である。なお、大型の織り道具が残っていることから、古くは幅30センチくらいまでのものが製織されていたと推定されている。

機の原初の形に近いとされる腰機で、本来はその製織に向かない複雑な組織織を、わずかな人数の継承者が織っていて、本土から遠隔地の離島において独自に発達した痕跡を有し、また江戸時代以前の歴史が判っていないなどの理由から、かっぺた織は織物研究、織機研究、史料研究、織物文化の研究、文化財研究、手織り技術の研究など、研究者の研究分野から着目点が異なり、多様な先行研究が行われてきた。これら先行研究については第二章において

詳述する。なお、工芸技術を指す以外に、織られた織物もかっぺた織と呼ばれている。

また、綿の栽培が少なかった八丈島においては、綿は高級品で、絹織物が庶民の衣類であった¹⁵ことから、かっぺた織も多くは絹糸で織られてきたとされている。記録作成等の措置を講ずべき無形文化財として選択されている間に織られたものには、化学染料で染めた糸を用いたと推測されるものがあるが、化学染料が導入される前は、白糸と天然染料で黄・樺・黒に染めた、着物や帯を織った残糸が用いられていたと考えられている。

第二節 かっぺた織（織物）の記録・保存

かっぺた織の実物が常に見学できるのは、八丈島にある黄八丈めゆ工房¹⁶である。工房では、独自にかっぺた織機と織物を研究し、また、製織途中の織機を、畳敷きの部屋の柱に括り付けて、実際に織った帯や紐、織りの記録を展示していた。この織機は、先行研究中に掲載されている写真とも合致し、かっぺた織が日常の中にあった時代の風景として、最も正確に再現された展示であると推測する。

これ以外は、所蔵情報も観覧機会も限られているのが現状である。

島内では、八丈島歴史民俗資料館が所蔵しているが、2022（令和4）年現在、東京都八丈支庁庁舎の展示ホールにおける仮開館¹⁷であるため、展示は所蔵品のごく一部に限られており、かっぺた織は非公開となっている。

また、博物館資料として所蔵が確認できているのは、東京国立博物館の2点を含む計4点であるが、画像は公開されていない¹⁸。このほかに国立民族学博物館、東京都や公益財団法人設置の博物館・資料館が保管している可能性があり、所蔵を確認しているが、公開されている所蔵品データベースには該当がなく、個人蔵同様、個別に所蔵調査を進める必要がある。

映像資料については、3点の所在が確認できているが、うち1点の国立民族学博物館所蔵資料は、再生機器の動作不良によって、視聴して内容を確認することができていない。残りの2点の内容、及び他の映像資料の所在を引き続き調査したい。

検討対象とした実物及び映像資料（表1、2）を添付する。

第三節 「文化財」としてのかっぺた織

文化庁の前身である文化財保護委員会は、かっぺた織を1962（昭和37）年3月30日に、玉置びんを

技術保持者として「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」に選択¹⁹し、1980（昭和 55）年に玉置氏が死去され、選択は解除²⁰されている。

選択に先立ち、1958（昭和 33）年 7 月に、太田英蔵が八丈島を訪問している。東京都の調査団に私的に参加した記録中で、玉置を訪問したほか、近隣に住む高齢女性が腰機で下帯を織っていたこと、玉置の機を譲り受けたこと、東京国立博物館の技官だった山辺知行に報告した記録を残している²¹。この報告によって、後に渡島調査が行われ、記録作成等の措置を講ずべき無形文化財としての選択に至った経過の記録がある²²。選択されていた期間に、記録が作成されているが、映像記録はない²³とされている。『文化財保護委員会年報』昭和 35-37 年度における「かっぱた織」と明記された記載は昭和 37 年 3 月に選択された記述のみである²⁴。

選択後に、文化財保護委員会・文化庁が作成したとされている記録（調査報告書）については、書誌を公開した資料が現時点で確認できておらず、国立国会図書館オンライン、同サーチ、同デジタルコレクション、同インターネット資料収集保存事業、文化庁ホームページ、東京文化財研究所刊行物リポジトリにおいても検索結果が得られていないため、所蔵調査を継続している。

なお、特許庁は、『標準技術集』の一部として『伝統的繊維製品』を 2005 年に公開している。その中で、かっぱた織を「織物日本の浮文織（絹）」に分類²⁵し沖山道による図解、織り布の写真が掲載されている。

第二章 かっぱた織の研究史

かっぱた織を対象とした研究は、①現在「黄八丈²⁶」と呼ばれている絹織物を含めた八丈島の染織文化研究、②機道具を対象とした民具・民俗研究、③製織技法研究、④文化資源研究という側面があったと考えられ、本章各節において詳述する。なお、これらの研究において、かっぱた織は常に八丈島の絹織物の研究と共に考察されてきたことも特徴として挙げられる。検討対象とした資料（表 3～6）を添付する。

第一節 八丈島の染織文化研究の視点

現代において、かっぱた織が最初に評価されたのは秦秀雄による調査である²⁷と考えられている。

秦は 1930（昭和 5）年に八丈島を訪問し、1931（昭和 6）年に『黄八丈』を著す。著作は主に黄八丈を紹介することに主眼を置いていたが、八丈島

の気候、産業、風俗も紹介しており、島内の知人を介し三根地区に住む 70 歳を超えた女性が紐を織っていることを紹介する。経糸を柱にくくりつけて、無地の糸にあやを執りつつ織って行くと幾何学的な模様が出ると記述しており、また、終日織って一尺ほどしか進まず、1 本に 4～5 日かかるという記録を紹介した。島の女性の当時の服装についても触れ、廣帯をせず、野良着に前掛けをすとし、織った紐は「前掛けの 5 分程の幅」の紐に用いていた²⁸としている。

その後、民藝運動の同人で染織家であり芹沢銈介の弟子でもあった岡村吉右衛門が、1937（昭和 12）年黄八丈の染織技法の習得のため滞在し、その成果を柳宗悦に報告したことで、1939（昭和 14）年に『工藝』第 97 号において特集が組まれ、岡村吉右衛門と柳悦孝の共著「黄八丈」が、田中俊雄による「文献から見たる八丈織」²⁹とともに掲載される。田中は秦の『黄八丈』の真田帯の記述を引用し、『伊豆海島風土記』³⁰の機を用いずに織る「八反」³¹との関係の可能性を論じている。近世文書と真田織の関係性を検討したのは、本記述が初出と考える。なお、民藝運動の同人らの収集は、黄八丈については数多くが保存されているが、八丈島の真田織またはかっぱた織とされる収集品は、現時点で確認できていない。

田中俊雄が「文献から見たる八丈織」に著した近世文書の記述や絵図と、実際にその時点で織られていた八丈島の絹織物及び織機の比較検討は、戦後、1950 年以降に再開されたと推測される。

第二節 織機・機道具を対象とした民具・民俗研究の視点

日本における織機は、考古学のほか、機業労働史、産業史、技術史において、戦前から研究されてきた。他方、かっぱた織研究における織機を対象とした研究は、1960 年代からようやく着目されるようになったと考えられる。

例えば角山幸洋は 1965（昭和 40）年に『日本染織発達史』を著したが、以降、考古学・史学研究の視座から機と織り布の特徴が研究されるようになる。特に角山は、かっぱた織の起源を検討するにあたり、近世文書中の絵図と、現存するかっぱた織との関連性について検討した。『八丈三宅新島神津島諸職業図』の織り手と綜紵操作をする 2 人組で機を織る絵図に描かれた機を、かっぱた織の機と推定する説を発表³²し、この説は段木一行³³、辻合喜代太郎³⁴、竹内晶子³⁵らに支持され引用されていく。ま

た、段木は、『八多化の寝覚草』の絵図についても、かつぺた織りであると推定している³⁶。

一方、岡村吉右衛門は、『庶民の染織』において、帯織りの図と推定する説を発表し³⁷、後年、篠原和子³⁸、吉本忍³⁹が同様の結論に至っている。

しかし、織機・機道具と近世文書の絵図を比較検討する研究は、篠原和子、吉本忍の研究以降、新規の比較検討を行った報告が確認できていない⁴⁰。

かつぺた織が腰機織であることから、原始機との直接的な遺制⁴¹についての検討の試みもあったが、現時点で新規の出土資料もなく、原始機が6～7世紀ごろに廃れた⁴²のち、どのようにして八丈島に伝わったのか、また、なぜ腰機で複雑な組織を織ようになったのか、江戸時代以前の出土資料や文書などによる記録が発見されておらず、考古学的には証明が困難であるとの結論⁴³となっている。

第三節 製織技法研究の視点

織機や織り道具の起源の探求とともに、織り布に着目した検討も行われる。このため、どの紋様を織った記述かが特定できないものが含まれるものの、綜統操作と剣型刀杼を使った糸道の開口方法については角山幸洋⁴⁴、富山弘基⁴⁵、山辺知行⁴⁶らが記述している。一方、技術史の立場から、太田英蔵は、かつぺた織りに通じるものとして、倭錦や異文雑錦との関係性を考察⁴⁷し、組織図と同様の想定図⁴⁸を用い図解している。また、吉本忍は、布の断面の糸の動きを拡大し「経畝二重組織織の断面」⁴⁹として図解している。

1980年代からは、織機・機道具と布の研究に加えて、外国や他民族の伝統的染織技法の研究者、研究経験のある織り手による技法研究が行われるようになったと推定される。実際に模して織ることを念頭に、無形の工芸技術を記録した。こうした記録は、個人蔵または研究会等の参加者のみに配布されていた資料として、2件⁵⁰が確認できている（ただし、国内図書館での所蔵が確認できていない）。また、小林桂子は2017（平成29）年に刊行した自著⁵¹において「市松紋様を織る機の記録」を掲載している。この記録には、経糸に綜統掛けをする位置、かけ方が組織図様の図解で詳述されている。

第四節 文化資源としてのかつぺた織研究の視点

文化財保護委員会における国宝、有形・無形の文化財の指定は、我が国の文化資源の保護と保存のために始まったが、社会的は高度経済成長期を経て、

文化財を保護と保存の対象から、観光の目的、対象として捉える時代に移る。

記録作成等の措置を講ずべき無形文化財としてのかつぺた織の研究は、山辺知行らによる染織品の研究以降、地方の名産品や文化資源としても着目され、観光資源や地域振興に関するニーズと密接に関わってゆく。遠藤元男らによる『日本の名産事典』において、竹内淳子が「一般には販売していない」としながらも織り方を解説⁵²したのは、1977（昭和52）年である。黄八丈という産業観光資源とともに、かつぺた織も人文観光資源として評価されていたと考えられる。

また、『月刊染織α』⁵³には、かつぺた織に関する取材記事及び写真が多数掲載されており、織り手、織道具、同じ伊豆諸島の新島、三宅島などの類似の真田織が紹介されている。

第三章 技法研究に向けた先行研究の課題

第二章において先行研究を概観し、それらは①八丈島の染織文化研究の視点、②織機・機道具を対象とした民具・民俗研究の視点、③製織技法研究の視点、④文化資源研究の視点に大別できた。

それぞれの視点で行われた研究成果からかつぺた織は模製できるのか、各節において評価を試みる。

第一節 近世文書研究からの技法研究

第二章第一節の八丈島の染織文化研究の視点、第二節の機道具を対象とした民具・民俗研究の視点では、いずれも近世文書を参照し、現存する織物・織機と近世文書に残されている記述や絵図との比較を行い、かつぺた織の織物と織機を同定しようと試みたものである。

八丈島から貢納された絹織物には、その規格をさだめた文書、織り見本帳である『永鑑帳』⁵⁴が残されており、縞割や箆配り、組織が詳細に残っている一方、真田織については記録が乏しく、『八丈実記』に真田と記述されている箇所が数か所、綜統掛けと推測される記述が1か所ある⁵⁵が、用いた糸の情報や、現在私たちが見ている玉置びんのかつぺた織の綜統糸の経糸へのかけ方、綜統操作、糸道の開き方に関する記述はない。また、綜統がけと推測される添え書き箇所についても、綾帯機の図に添えられたもので、可能性が推測されているに過ぎない。

絵図との比較検討においても、真田を織ると原典に明記された絵図はない。腰機織ではあるが綜統が付いていない状態のもの⁵⁶、綜統は付いているが枚数からの推測では高機の4枚綜統に相当する組織し

か織れない絵図⁵⁷で、その関連の可能性を説明するにとどまる。かっぱた織の特徴である上下に綜統が付けられた織機の図はなく、これまでの近世資料の再調査における発見や、新規の史料の発見がない限り、技法研究に用いることは困難であるとする。

第二節 現地取材・調査報告からの技法研究

秦秀雄以降、これまで多くの研究者が現地調査を行ってきた。その後、文化財として注目されたことによって織機の形状や織り方、織り出される紋様が解説される。初期のかっぱた織研究は、本土から見て物珍しい織物の記録と紹介が中心で、織り動作の説明や紋様の記述があるが、補助的資料としての有用性にとどまると考える。現時点では図書として出版される前に発表された雑誌掲載論文についての網羅的調査が完了していないため、以上の点も含めて、調査を継続する。

また、先行研究の一部において、玉置びん以外は織り手がいないとされていたが、別の先行研究及び聞き取り調査において、他に複数の織り手が確認できている。島内での織り手の確認や、実際に織り手を訪問し、誰から教わり、どのようにして技術を習得したのかについて聞き取った記録はなく、今後、現地調査の際に確認を行いたい。このほか、山下昌子によれば⁵⁸、かっぱた織にはバリエーションがあること、また、近隣の島嶼部でも、腰機で真田織が織られていたとされており、関連性や相違について検討を要するが、文化的固有性について検討する資料であって、技法研究とは性質を異にするとする。

なお、先述のとおり、文化財保護委員会が調査記録（組織図を含む報告書）を作成したとの情報があるが、現時点で先行研究の中で引用や参照が一例も確認できていない。引用註や参考文献での記述がないことから書誌情報が確認できず、また、文化財保護委員会年報等においても、報告書の名称が明らかでないため、内容について判断することができず、現時点では模製のための技法研究に利用することができない。

第三節 現存する織機・織布からの技法研究

腰機の場合、経糸が外されてしまった場合、腰機は道具一式が揃っていても、いずれも棒状でそれぞれが独立している部品で構成されているため、相互の関係を推測するほかなく、機ごしらえの全体像を再構築することは困難である。

織りの途中で作業を中断した状態で保存された織機一式がある場合、機ごしらえの全体像の検証が可

能であるとする。しかし、現時点で博物館等の所蔵品も少なく閲覧の機会が限られていること、時間の経過によって糸の劣化が進んでおり、取扱いには注意を要する状態であると推定され、今後、実物を元に織機を復元する機会は、所蔵館の学芸員以外にはないという前提で、調査を行う必要に迫られているとする。また、織布の熟覧も技法研究において重要であるが、実物資料所蔵調査において所蔵が確認できている件数、作品数が少なく、織機同様、誰もが容易にできる状況ではない。

その代替として、写真、解説図が有効であり、山辺知行の著作⁵⁹の、織機の写真、かっぱた織の織物写真がカラー図版、『月刊染織α』掲載写真は、貴重な情報資源であるとする。また、機の構造を説明する図として、沖山道文責「かっぱた織」⁶⁰、吉本忍の「カッペタ織機の構造」⁶¹からは、機の構成の全体像を把握することができる。

組織図に類似する資料としては、太田英蔵の倭錦の想定図、吉本忍の「経畝二重組織織りの断面」の図を参考とすることができると考えられる。特に、土肥悦子⁶²、小林桂子⁶³による組織図様の図解は、ウロコと市松の紋様を織り出す要となる縞割と綜統がけを模製することが可能であると考えられ、その他の紋様について類推することも可能であるとする。

第四節 情報の統合の必要性

紐や布を織る場合、使用の目的によって、糸の種類（強度）、織り密度が選択されるため、糸の素材や太さ、撚りの情報、整経長、整経方法、綾の取り方、使用する織機とその道具、箆羽、綜統、緯糸密度、組織図（経糸緯糸の交差を記した織物組織とタイアップ図）、など、様々な情報が必要になる。

現時点で、この中で確実に模製に用いることができる情報は、糸の素材、使用する織機とその道具、箆羽の数、箆と綜統の位置、特定の紋様の綜統がけのみである。

また、これらの情報の全てが揃っている情報資源がないため、確認できている資料の情報の統合とともに、未確認の資料についての調査を継続する必要があるとする。

現時点では調査が完了していない映像資料の調査は、織りの作業において、経糸に張力をかける動作、効率的な綜統操作、緯入れ、緯打ちの力加減などを読み取ることができ、今後の模製の作業において、重要な資料となると考える。

第四章 かっぱた織研究の可能性と意義

第一節 資料収集の継続とその保存

島内での織り手の減少は、人から人への技法の伝承にとって最も懸念されるものであり、また、出版された技法資料がほとんどないことも保存と継承の課題となっている。特に、文化財としての価値・技法記録の公開が十分でなく活用できていないことは、かっぱた織の理解者を増やし、保存へ繋げることへの課題となっていると考える。このため、今後も文化財保護委員会の報告書の所在について、継続して調査を行う。

併せて、先行研究の一部には、個人蔵の研究資料があり、今後これらの収集を行い、滅失を防ぐ必要があると考えている。島内で作成された技法資料は、主に講習の参加者に配付された研究ノートの体裁であるため、個人での保管が主となっている。これらの資料は、次節で論じる組織図に準ずる織り図の作成において解決策を得られるものと期待しており、保存の観点からも、デジタル化、出版の検討、公立図書館等での郷土資料としての所蔵など、著作権者や、関係機関と協力し、適切な保存方法を検討する必要があると考える。また、郷土の文化を郷土のみで守る時代から、遠隔地でも情報を共有し、その滅失の危機分散を図る、時代に相応しい技法保存の方法を検討する必要があると考える。

第二節 技法資料の作成による情報の共有

多くの織り手は、単純な三原組織の場合はそれぞれの組織の名称のみの記述で情報を交換できるが、複雑になればなるほど、組織図が共通言語として使用される。文化財保護委員会によっても組織図が作成されたとの情報があるが、閲覧したことがある在住者からの聞き取りでは、難解で理解できなかったとされている。組織図は、二重織は表現が難解になること、作図において綜紵を上下いずれかに動かす多綜紵の高機での製織が前提となっているため、上下に綜紵を付けるかっぱた織の特徴を理解した図へと展開する必要があると考えている。

また、かっぱた織のもう一つの特徴である幾何学紋様を織るためには、組織図中に糸の配色の記述を加える必要があり、この組織図に準じる織り図の作成の試みは、当地でのかっぱた織の継承のための複製、その他島外の織り手による模製において、製織に必要な情報の共有に繋がることと考える。

第三節 かっぱた織技法研究の意義

かっぱた織研究は、八丈島という一地域の事例の考察であると捉えられるかもしれない。しかし、ローカルな事例は、さらに大きな問題の輪郭を鮮明に示すことがあり、本例もその一例であると考ええる。すなわち手織による織物文化の衰退や継承の危機、産業構造の変化、産地の人口減少と担い手の減少といった今日的課題は、国内各地で共通して進行している。本稿で示した、八丈島で独自に発展した手織り技術は、その島の固有の文化の一部であるが、人間が育んできた手技の技術、すなわち普遍的な人類知そのものである。その保存と継承こそ、まさに現代社会における重要な課題であり、本研究で示した一連の作業は、その解決にむけた方法論の検討として、大きな貢献を果たしうるものと考ええる。

機械化が進む現代社会において、昔ながらの手織り機を用いた人の手による製織、手織りの技術は、もはや継承の意義を持たない、古い時代への郷愁であるかのように思われるかもしれないが、機械化は手の技があつて初めて成立する。人の手の技の無いところに、効率を高め品質を均一にする機械化は成立しえない。

技法を正確に記録し長く保存することは、技法を継承し、将来の技術革新の基盤を形成することにもつながる極めて意義深いものであると考える。

おわりに

最後に織布という実物の作成の必要性について付記したい。

布を織る技術は、衣服や道具としての布や紐を製造する技術である。布や紐には用途にあった性質が必要で、伸縮や柔軟性、快適性や装飾性など、目的に沿って素材と技法を選択して織られ、用いられてきた。このように、織物は、物性のみではなく、感性における評価も重要な意味を持っている。

その評価には実物の織布が必要であり、かっぱた織においても、実物の織物の製作を行うことによって、先行研究で示されてきた文章や組織図を用いた技術の説明では評価しきれなかった部分について、再評価が可能になるものと考ええる。それは従来の目的・用途の評価とともに、現代的価値の発見につながる可能性を有している。加えて、複製・模製から得られた知見をもとに、今後、染織作品として制作・展示されることが実現した場合には、この技術の価値と独自の文化や感性を、多くの人に伝達できる可能性を有するものといえよう。

¹ 「かっぺた」の表記は、文化財保護委員会、文化庁資料ではひらがなで記載されている。研究者によっては「カップタ」とカタカナで書くこともある。本論文では、原則としてひらがなで表記し、特に先行研究の引用の際に限り、著者の表記を用いる。

² 文化庁「国指定文化財等データベース」
<https://kunishitei.bunka.go.jp/heritage/detail/313/208> (2022年6月25日閲覧)

³ 竹内晶子『弥生の布を織る：機織りの考古学』東京大学出版会、1989年、p. 88。富山弘基「富山弘基の染織の旅 19 本場黄八丈のはるかなる故里八丈島 2」『月刊染織α』19号、1982年10月、p. 144。

いずれにおいても「文化庁が命名」とある。ただし、記録作成等の措置を講ずべき無形文化財選択時点では、文化庁の前身の文化財保護委員会によると思われる。なお、富山は太田英蔵からの聞き取りとして、緯打ち具であり開口保持具にも用いる剣状の刀杼の呼び名が「かっぺた」で、これが由来であるとしている。

⁴ 本論文では、八丈島内での再現織りを「複製」とし、島外でその技法を用いて同じ形式の機で同じ組織や紋様を織ることを「模製」として用いる。特定の地域で発達・保存・伝承されてきた技術を用いて織られた織物は、本来、地域性や郷土史と一体不可分の関係にある。その文化圏の中で織ることと、文化史や技術史的にも共通性のない織り手や、他の地域で織ることは区別して検討したい。

⁵ 菊池理予「我が国における工芸技術保護の歴史と現状：染織技術を中心として」、『無形文化財遺産研究報告』5号、2011年3月、p. 5。

⁶ 前掲 (2)、「国指定文化財等データベース」

解説文抜粋：「八丈島に帯の紋織りが伝わっている。織り道具が非常に古風で、例えばアイヌや台湾に現存する織り具と同様、織機として組み立てないで用いるものである。組織は風通様の二重織りで他に類をみない。文様は幾何学文様としてあらわれ、竹の子、ソロバン、ウロコ、山ミチなどと称されるものがある。現在これを製織するのは玉置びん唯一人で、幅四センチ位までの紐状の織物である。古くは幅三十センチ程のものが製織されることが、同種の大型の織り道具が残っているところから推測される。」(2022年6月25日閲覧)

⁷ 高機とは機台を有し布巻具、経巻具とも機台に固定し、張力を調整する織機。上糸・下糸とも綜絢を用いて開口し、中筒を用いない。また、緯越具は一般的に小型の杼が用いられ、緯打ちは箴を用いる。一般的に「着物を織る機」と説明した場合、連想する機は高機である。

⁸ 地機は、機台がある織機であるが、高機と異なり、経巻具は機台に置くが、織り手が後帯 (back

strap) を用いて布巻具を腰で引き張力を調整する。糸道の開口には中筒と綜絢を用い、下糸を天秤式の綜絢操作具で操作する。緯打具は、一般的に緯越具と刀杼が一体となった管大杼が用いられる。また、高機での箴は、経糸密度の保持とともに緯打具の役割としても用いているのに対し、地機の場合は経糸に対して緯糸が垂直に交わるように整える役割と、経糸密度と織り巾を揃える役割のためにあり、緯糸の打ち込みは管大杼などの刀杼によって行う。国内では結城紬、越後上布、近江上布、藤布などが、現在も地機で織られている。

⁹ 腰機は、機台のない織道具である。経糸の一方を織り手の腰に後帯で固定し、他方を足で突っ張るか、壁や柱に固定し、張力を調整する。中筒と綜絢で開口し、機台がないため、綜絢操作は手で行う。緯越具と緯打具は別のことが多く、箴も用いないものが多い。外国では、現在も腰機で織っている地域・民族がある。

¹⁰ アットゥシ織はオヒョウなどの樹皮を糸に用い、平織の布を織っている。石川伊波メンサー織は、主に綿糸で、平織の地に経浮きの紋織りが入る。

¹¹ 東村純子『考古学からみた古代日本の紡織』改訂新装版、六一書房、2012年、p. 72。

¹² 吉本忍「八丈島の絹織物と手織機」宮田登著者代表、網野善彦ほか編『海と列島文化 第7巻 黒潮の道』小学館、1991年、p. 444。

¹³ 紋様の記述には、漢字 (かな交じりを含む)、ひらがな、カタカナなど、話し手、著者によって表記・表現が異なることがある。

¹⁴ 真田織の名称の由来にも諸説がある。また、二重織のもののほか、一重 (平織) のものがあるとされる。本論文では、特に注記しない場合、かっぺた織が命名される以前の読み方は全て「真田織」で統一する。

¹⁵ 吉本忍前掲書(12)。p. 440。

¹⁶ 染織元黄八丈めゆ工房 (東京都八丈島八丈町中之郷 2542)。

¹⁷ 八丈島歴史民俗資料館 (東京都八丈島八丈町大賀郷 2466 番地 2 東京都八丈支庁内)。八丈町 HP
<https://www.town.hachijo.tokyo.jp/kakuka/kyouiku/rekimin.html> (2022年6月25日閲覧)

¹⁸ ColBase: 国立文化財機構所蔵品統合検索システム
https://colbase.nich.go.jp/collection_items?locale=ja&page=1&limit=100&free_word=%E3%81%8B%E3%81%A3%E3%81%BA%E3%81%9F%E7%B9%94&with_image_file=0&only_parent=0&category_ids= (2022年6月25日閲覧)

¹⁹ 東京文化財研究所

<https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/9825.html?hilite=玉置びん> (2022年6月25日閲覧)

出典：「玉置びん」『日本美術年鑑』昭和 56 年版 (267 頁)、「玉置びん 日本美術年鑑所載物故者記事」(東京文化財研究所)

²⁰ 吉本忍前掲書(12)、p. 451。

²¹ 太田英蔵、「倭人伝の和錦と異紋雑錦についての試論」、文化出版局、川島織物編、『太田英蔵染織史著作集下巻』、文化出版局、1986 年、p. 90-100。

(初出は服装文化協会編『服装文化』第 152 号、1976 年 10 月)

太田は、昭和 28 年に文化財専門審議会第一分科会工芸品部門専門委員に就任し、昭和 34 年、36 年、38 年に再任され、昭和 56 年までその任に当たっている。

²² 太田英蔵前掲書 (21)、p. 100。

²³ 菊池理予「我が国における工芸技術保護の歴史と現状-染織技術を中心として-」『無形文化遺産研究報告』国立文化財機構東京文化財研究所『無形文化遺産研究報告』編集委員会 編、p. 5。

²⁴ 文化財保護委員会、『文化財保護委員会年報』昭和 35-37 年度、p. 72。

²⁵ 特許庁「【技術名称】1-3-2-1-6 かっぱ織」『伝統的繊維製品 標準技術集 平成 17 年度』、2005 年、p. 148-149。

https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_1249400_po_1-3-2.pdf?contentNo=15&alternativeNo= (2022 年 7 月 1 日閲覧)

²⁶ 菊池理予前掲書 (23)、p. 6。

「黄八丈」は「黄八丈技術保存会」を認定団体として、昭和 32 年 3 月 30 日に、記録作成等の措置を講ずべき無形文化財に選択されている。

²⁷ 『民藝』編集委員会編集部「黄八丈関連年譜」『民藝』編集委員会編『民藝』816 号、日本民藝協会 2020 年 12 月、p. 40-41。

²⁸ 秦秀雄『黄八丈』郷土研究社、1931 年、p. 51-52。

²⁹ 田中俊雄「文献より見たる八丈織」『工藝』97 号、日本民藝協会、1939 年、p. 37-61。

³⁰ 「温故知新」静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(8) 平成 12 年 9 月 1 日号において、『伊豆海島風土記』は天明年間に書かれたものとされている。
https://www.tosyokan.pref.shizuoka.jp/data/open/cnt/3/354/1/SZK0002684_20040727142127304.pdf (2022 年 6 月 25 日閲覧)

³¹ 田中俊雄前掲書 (29)、p. 54。

なお、諸説あるが、一反分で八反分の価値に換算された織物を「八反」「八端」掛けと呼んだとされており、同書に掲載されている岡村吉右衛門、柳悦孝「黄八丈」、p. 20 においては、岡村らは「八端」として綾織り布の名称を挙げている。

³² 角山幸洋『日本染織発達史』三一書房、1965 年、p. 35-37。

³³ 段木一行「八丈島のカッペタ織」、森浩一ほか『技術と民俗 上巻 海と山的生活技術誌』、網野善彦ほか編、『日本民俗文化大系』第 13 巻、小学館、1985 年、p. 140-141。

³⁴ 辻合喜代太郎「八丈島(黄八丈)の旅」『衣生活研究』145 号、1988 年 9 月、p. 42。

辻合は岡村吉右衛門『日本原始織物の研究』p. 191-192 を引用し、道具立ては構造的にアイヌ、綿毬布機と同様としているが、結論は異なる。なお、岡村は『庶民の染織』において帯織りの図と推定している。

³⁵ 竹内晶子『弥生の布を織る：機織りの考古学』東京大学出版会、1989 年、p. 88-89。

竹内は角山を引用して、「八丈三宅新島神津島諸職業図」に描かれたカッペタ織の機では、大型の経巻具が台に固定しているので、もともとは経巻具があったらしいと述べている。」としている。

³⁶ 段木一行前掲書 (33)、p. 141。

³⁷ 岡村吉右衛門『庶民の染織』衣生活研究会、1976 年、p. 258。

³⁸ 篠原和子「八丈島のかっぱ織(1)ーその背景と現状ー」『金蘭短大研究誌』13 巻、1983 年、p. 36。

³⁹ 吉本忍前掲書 (12)、p. 455。

p. 451-462 において、吉本は八丈島にはカッペタ織機、綾帯機、地機、織り習い用の機、高機があったとしている。

⁴⁰ 小林桂子『もようを織る：バスケットから幾何・布から曲線』日貿出版社、2017 年、p. 144。

『八多化の寝覚草』、『八丈實記』、『八丈三宅新島神津島諸職業図』の絵図についての引用があるが、「原始的な機で織る綾織」の節で紹介し、かっぱ織についてではなく、八丈島の八端掛の考察として参照している。

⁴¹ 角山幸洋前掲書 (32)、p. 35。原始機の形式的な遺制を伝えるものとしてカッペタ織について記述。原始機から、機台を附属した地機への発展の方向とは別に、原始機の単綜統が多綜統に変わるという構造的発展について考察している。

なお、「原始機」ないしは「弥生機」という呼称は、角山や竹内晶子、東村らが用いているが、腰機のうち、国内の出土資料から推定される古代の腰機の織機に用い、一般名詞としての「腰機」と区別し用いていると考える。

⁴² 東村純子『考古学からみた古代日本の紡織』改訂新装版、六一書房、2012 年、p. 122-123。輪状式原始機について、7 世紀初めまで存続した可能性があるとしている。

⁴³ 角山幸洋前掲書 (32)、p. 35。「原始時代からの発展形式を伝えるものか、あるいは、のちに南方系の機法を摂取したのかは、別の問題である」としている。

⁴⁴ 角山幸洋前掲書 (32)、p. 37。

⁴⁵ 富山弘基、大野力、『日本の伝統織物』、徳間書店、1967年、p. 117。

⁴⁶ 山辺知行ほか著、山辺知行監修『日本の染織』毎日新聞社、1975年、p. 285。

⁴⁷ 太田英蔵前掲書(21)、p. 103-104。弥生時代の技術をそのまま伝えたものか不明であるとしながらも、白鳳時代ころまで織り伝えられていたと考えられる可能性を上げ、「考古学者は古式のものが出土しないかぎり説をとねえないが、技術史的立場にある者は、合理的に可能性があれば遡及し解明して差し支えないだろう。」としている。

⁴⁸ 太田英蔵前掲書(21)、p. 101、図はp. 103。13図 倭錦の想像図。

⁴⁹ 吉本忍前掲書(12)、p. 444、図219。

⁵⁰ 山下めゆ工房の山下誉氏が、復元の過程で得た箴通しと綜紵がけについての知見を、組織図とは異なる独自の図を書き起こしている。また、土肥手織り研究会が作成した『手織りの仲間』37号にも、土肥悦子氏を書き起こした図が掲載されている。しかし、いずれも出版物ではなく、現地または会員のみが保管している資料である。

⁵¹ 小林桂子前掲書(40)、p. 379-380。

⁵² 竹内淳子「黄八丈・かっぺた織」遠藤元男ほか編『日本の名産事典』東洋経済新報社、1977年、p. 272。

⁵³ 『月刊染織α』は1981年に創刊され2007年まで発行された月刊誌。特定の学問領域からの研究手法にこだわらず染織関連情報を掲載し、速報性と研究志向とが共存している。ジャーナリスティックな視点での記述、聞き取り調査の記録については、その正確性の検証が困難な情報を含んでいる可能性があるが、染織を軸に分野を横断した記事が掲載されている。

⁵⁴ 吉本忍前掲書(12)、p. 444-445において、『八丈実記』の記述を元に、上納裂見本である『永鑑帳』が作成されたことが説明されている。貢納の際に規格外品を少なくするために1831年に島民によって作成された。

⁵⁵ 近藤富蔵、八丈実記刊行会編『八丈実記』第1巻、緑地社、1964年、p. 364、p. 447、p. 449、p. 522。

⁵⁶ 鶴窓主人『八多化の寝覚草』、1848年。「島産物綾もの 織る図」。

⁵⁷ 『八丈三宅新島神津島諸職業図』(徳川宗敬寄贈、国立東京博物館蔵、江戸時代写本) 機台がなく2人掛かりで織っている絵図と傾斜型の地機での製織の絵図がある。

⁵⁸ 山下昌子「暮らしの中の黄八丈：袋織り」、『げんりゅう』35号 p. 29-34。

⁵⁹ 山辺知行ほか著、山辺知行監修『日本の染織』、毎日新聞社、1975年、p. 300、写真71。

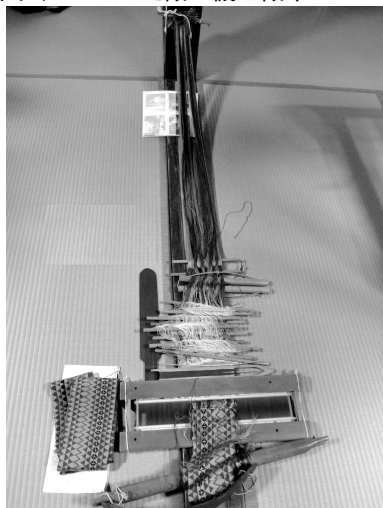
⁶⁰ 特許庁前掲書(25)、p. 148。図1 かっぺた織の織機。出典：「かっぺた織」、1986年10月、沖山道文責、沖山道かっぺた織教室発行、10頁。

⁶¹ 吉本忍前掲書(12)、p. 453 図22。

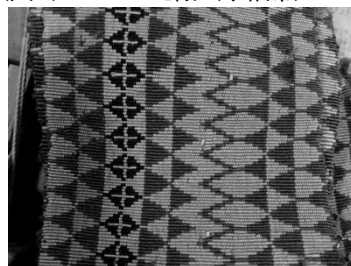
⁶² 土肥手織り研究会編『手織りの仲間』、第37号、1986年、p. 1-10。

⁶³ 小林桂子前掲書(40)、p. 378-382。

(図1) かつぺた織の機と織布



(図2) かつぺた織 (半幅帯)



所蔵：黄八丈めゆ工房（著者撮影（2017年））

（図1は写り込み部分を加工修正）

図1手前から、腰当て、前がらみ、織布、箴、綜統。経糸は奥の柱に結びつけている。綜統付近左手に「かつぺた」の語源となった箴（へら）状の緯打ち具である剣型刀杼。経糸の開口の際にも補助的に用いる。箴の左手に、幅四寸ほど（約15cm）の織布と山下氏が作成した資料を展示していた。

以下の情報資源の調査状況は2022年6月現在。 【表中の略】NDL：国立国会図書館デジタルコレクション

(表1) 実物資料所蔵調査

No.	資 料	所 蔵
1	I-4156 「かつぺた織技術記録(うろこ、そろばん、織柄見本)」 I-4159 「続かつぺた織技術記録」	東京国立博物館
2	資料名不明（現在非公開）	八丈島歴史民俗資料館
3	資料名不明（展示の記録はあるが所蔵情報は未確認） 特別展「世界の織機と織物—織って！みて！織りのカラクリ大発見」 (2012年) に沖山道が協力。	国立民族学博物館
4	資料名不明 山辺知行収集品寄贈記録があり、2点所蔵を確認。閲覧確認未済。	遠山記念館（公益財団法人）
5-1	沖山家（沖山道氏家族）（八丈島）	個人蔵
5-2	山下家（黄八丈めゆ工房）（八丈島）（一部公開）	
5-3	H.Y氏（山下昌子前掲書（58）、p.31）	
5-4	著者（1点）	

(表2) 映像資料調査

No.	資料名	所蔵	製作等
1	「くらしの再発見 [15] 織る」	放送ライブラリー 番組 ID: 205772	放送番組センター 1971年1月15日放送
2	「八丈・かつぺた織り」	国立民族学博物館 (再生機器不良のため視聴不可)	放送番組センター TBS 映画社(協力)、国立民族学博物館(ビデオ監修)、1977年
3	「八丈島かつぺた織りの製作 (1987年取材映像より)」	要確認 (個人蔵を視聴)	国立民族学博物館特別展「世界の織機と織物— 織って！みて！織りのカラクリ大発見」において「2012年展示映像」として関係者へ配布

(表3) 近世文書（先行研究において頻出するもの）

No.	著 者	書 名	発行年	備 考
1		『伊豆海島風土記』	1781年頃 (推定)	
2	鶴窓主人	『八多化の寝覚草』	1848年	NDL（インターネット公開（保護期間満了）） DOI 10.11501/2537093
3	近藤富蔵	『八丈實記』	1848-1860年	東京都公文書館所蔵

			頃と推定	
4		『八丈三宅新島神津 島諸職業図』	江戸時代末期 写本 (19c)	東京国立博物館デジタルライブラリー https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/2848; jsessionid=D2A25FED8C5FD8731AC76617D2BB9EC6

(表4) 表3 近世文書の翻刻

No.	著 者	書 名	出版社	発行年	備 考
表3-1	静岡郷土研 究会編	『伊豆海島風土記・ 伊豆めぐり』	静岡郷 土研 究 会	1929 年	『伊豆海島風土記』の翻刻 NDL (インターネット公開公開 (保護期間満了)) DOI 10.11501/1193167
表3-2	鶴窓帰山	『八丈の寝覚草』	勉誠社	1985 年	勉誠社文庫 133 巻 鶴窓主人、『八多化の寝覚草』の複製と 翻刻 (解説: 中田祝夫)
表3-3	近藤富蔵 八丈実記刊 行会編	『八丈実記』 第1巻～第7巻	緑地社	1964～ 1976 年	近藤富蔵、『八丈実記』の翻刻 NDL (国立国会図書館内公開) DOI 10.11501/2992865 ほか
表3-4	(なし)				

(表5) 行政資料 (官庁刊行物)

No.	著者・編者	書 名	発行年	備 考
1	文化財保護委員 会	『文化財保護委員会年 報』昭和35-37年度	1964 年	NDL (国立国会図書館/図書館送信参加館内公開) DOI 10.11501/2526600

(表6) 先行研究等本論文において検討対象とした資料 (著者による分類)

分類基準は欄外に表記

No.	著者・編者	書 名	出版社	発行年	掲載誌・備考等	分類
1	秦秀雄	『黄八丈』	郷土研究 社	1931 年	NDL (国立国会図書館/図書 館送信参加館内公開) DOI 10.11501/1186395 秦秀雄、『手織物考』、五月書 房、1979年に再録	①
2	岡村吉右衛門、 柳悦孝	「黄八丈」	日本民藝 協會	1939 年	日本民藝協會編、『工藝』、第 97号、p. 1-21	①
3	田中俊雄	「文献より見たる八丈 織」	日本民藝 協會	1939 年	日本民藝協會編、『工藝』、第 97号、p. 37-61	①
4	角山幸洋	『日本染織発達史』	三一書房	1965 年		②
5 ※	太田英蔵	「織物」	文化出版 局	1986 年	川島織物編、『太田英蔵染織 史著作集上巻』、p. 339-390 初出:『古代史講座』第13 号、学生社、1966年10月	③
6	富山弘基、 大野力	『日本の伝統織物』	徳間書店	1967 年		①
7	島田謹介撮影 山辺知行解説	『紬』	光風社書 店	1968 年		③
8	山辺知行ほか 山辺知行監修	『日本の染織』	毎日新聞 社	1975 年		③
9 ※	太田英蔵	「倭人伝の和錦と異紋雑 錦についての試論」	文化出版 局	1986 年	川島織物編、『太田英蔵染織 史著作集下巻』、p. 91-105 初出:『服装文化』第152 号、1976年10月	②
10	岡村吉右衛門	『庶民の染織』	衣生活研	1976 年		①

			究会			
11	山辺知行	「染織」	第一法規出版	1976 年	石沢正男、本田安次編、『文化財講座日本の無形文化財 1』、p. 73-110	文
12	岡村吉右衛門	『日本原始織物の研究』	文化出版局	1977 年		②
13	竹内淳子	「黄八丈・かっぺた織」	東洋経済新報社	1977 年	遠藤元男ほか編、『日本の名産事典』、p. 272	④
14	富山弘基	「富山弘基の染織の旅 18 本場黄八丈のはるかなる故里八丈島 1」	染織と生活社	1982 年 9 月	『月刊染織α』、第 18 号、p. 145-150	④
15	富山弘基	「富山弘基の染織の旅 19 本場黄八丈のはるかなる故里八丈島 2」	染織と生活社	1982 年 10 月	『月刊染織α』、第 19 号、p. 141-146	④
16	富山弘基	「富山弘基の染織の旅 21 伊豆諸島で織物を伝承する元気な明治娘」	染織と生活社	1982 年 12 月	『月刊染織α』、第 21 号、p. 142-147	④
17	篠原和子	「八丈島のかっぺた織 (1) —その背景と現状—」		1983 年	『金蘭短大研究誌』、第 13 巻、p. 21-39	②
18	朝日新聞社編	『日本染織地図』	朝日新聞社	1985 年	シリーズ・染織の文化 3 巻	①
19	森浩一ほか	『技術と民俗 上巻 海と山の生活技術誌』	小学館	1985 年	網野善彦ほか編、『日本民俗文化大系』第 13 巻	④
20	土肥手織り研究会編	『手織りの仲間』第 37 号	土肥手織り研究会	1986 年	(所蔵情報なし)	③
21	山下昌子	「八丈島織の原点」	源流社	1987 年 1 月	『げんりゅう』、第 32 号、p. 27-30 (国立国会図書館所蔵なし。大学図書館蔵所蔵)	①
22	山下昌子	「暮らしの中の黄八丈：袋織り」	源流社	1987 年 10 月	『げんりゅう』、第 35 号、p. 29-34 (国立国会図書館所蔵なし。大学図書館蔵所蔵)	①
23	辻合喜代太郎	「八丈島 (黄八丈) の旅」	関西衣生活研究会	1988 年	『衣生活研究』、第 145 号、p. 41-45	④
24	竹内晶子	『弥生の布を織る：機織りの考古学』	東京大学出版会	1989 年		②
25	角山幸洋	「手織機 (地機) の東西差-産業史の立場から」	河出書房出版	1989 年	岩井宏実ほか著、『民具が語る日本文化』、p. 75-123	②
26	田中清香、土肥悦子	『図解染織技術事典』	理工学社	1990 年	p. 6-43-44 (かっぺた織)	①
27	吉本忍	「八丈島の絹織物と手織機」	小学館	1991 年	宮田登著者代表、網野善彦ほか編、『海と列島文化 第 7 巻黒潮の道』、p. 439-477	③
28	辻合喜代太郎	「再度、八丈島を訪う」	関西衣生活研究会	1991 年	『衣生活研究』、第 166 号、p. 66-70	④
29	前田亮	『図説手織機の研究』	京都書院	1992 年		②
30	編集部	「テキスタイル写真館 資料ファイル 5 八丈島の幻の織物 玉置びんさんの」	染織と生活社	1992 年 5 月	『月刊染織α』、第 134 号、p. 70-72	④

		かっぱた織」				
31	布目順郎	『倭人の絹：弥生時代の織物文化』	小学館	1995 年		②
32	編集部	「テキスタイル写真館資料ファイル (22) 伊豆諸島で古代機を伝承する人々、式根・新島の真田織・タケノコ織」	染織と生活社	1995 年 2 月	『月刊染織α』、第 167 号、p. 73-75	④
33	長野五郎、ひろいのぶこ	『織物の原風景 樹皮と草皮の布と機』	紫紅社	1999 年	モニカ・ペーテ 訳	①
34	角浦節子	「原始機の手織り入門 4 伊豆諸島・真田織りの技法に学ぶ 袋織 (二重織) の織り方」	染織と生活社	1999 年 2 月	『月刊染織α』、第 215 号、p. 69-72	③
35	特許庁	『伝統的繊維製品』		2005 年	『標準技術集』、NDL (インターネット公開) 永続的識別子 info:ndl.jp/pid/1249400	③
36	浜田裕木子、国立民族学博物館 MCD プロジェクト	「染織文献データ BOX103」	染織と生活社	2006 年 8 月	『月刊染織α』、第 305 号、p. 64	目
37	菊池理予	「無形文化遺産としての工芸技術保護：染織分野を中心として」		2009 年 3 月	『無形文化遺産研究報告』、第 3 号、p. 37-60 NDL (公開) 永続的識別子 info:ndl.jp/pid/10983735	文
38	角寿子	「国際天然染料シンポジウムと展覧会 2011 ヨーロッパ」	天然染料顔料会議	2010 年	『天然の色：然染料顔料会議報告 2010』、p. 1-8 https://earthnetwork.or.jp/wpcontent/uploads/2016/11/2011isend_europe_report_jp.pdf	①
39	菊池理予	「我が国における工芸技術保護の歴史と現状：染織技術を中心として」		2011 年 3 月	『無形文化遺産研究報告』、第 5 号、p. 1-15 NDL (インターネット公開) 永続的識別子 info:ndl.jp/pid/10983755	文
40	山下誉	「原始織り「カッペタ」～ 八丈島よりジャージー島へ」	天然染料顔料会議	2011 年	『天然の色：然染料顔料会議報告 2011』、p. 15-16	①
41	小林桂子	『もようを織るーバスケットから幾何・布から曲線』	日貿出版社	2017 年		③

No. の*印は初出を基準に時系列に整理

「分類」は第二章各節における検討に際し、以下の基準で区分した。

- ①：第一節において検討。主に染織文化研究の記述を主とするもの。なお、かっぱた織の記述がなくとも、八丈島の絹織物として「八反」「綾帯機」についての記述があるものを含む。
- ②：第二節において検討。織機の解説、機道具研究を主とするもの。
- ③：第三節において検討。製織技法研究を主とするもの。②の内容が含まれるが、織布のまたは織組織の図版があるもの。
- ④：第四節において検討。文化資源としての記述を主とするもの。①③の内容が含まれるが、高度経済成長期以降の現地調査記録、産業／人文観光資源的価値の記述を主とするもの。

文：文化財研究

目：文献目録

A Survey of Previous Research on "Kappeta-Ori" in Hachijojima Island : Towards the Preservation and Transmission of the Technique

ITAHACA Yayoi

"Kappeta-Ori" is a hand weaving technique using a stick backstrap loom that has been handed down over generations on Hachijojima Island, Tokyo. In 1962, the Commission for Protection of Cultural Properties selected Kappeta-Ori as an "Intangible cultural properties requiring special measures such as the creation of records". In addition to Kappeta-Ori, other stick backstrap looms that exist in Japan are those used for Attus weaving by the Ainu people in Hokkaido and those used for Ishikawa Iha Mensa weaving in Okinawa Prefecture. Both of these weave plain weave cloth on a stick backstrap loom. Unlike these techniques, Kappeta-Ori has the characteristic of weaving a double-weave on a stick backstrap loom. In particular, the warp threads of the Kappeta-Ori technique have heddles attached at the top and bottom, which differentiates them from those of other stick backstrap looms.

It is estimated that the Kappeta-Ori weaving technique was used as early as the late Edo period, but it is not known when it was first used. Furthermore, it is unclear whether Kappeta-Ori is a technique that has been used since ancient times or whether it was introduced from abroad.

Because of this historical background and complex weaving technique, it has attracted attention from researchers in various fields. However, due to the time required to understand and learn the techniques and the decrease in the number of instructors, the issues of preservation and inheritance have not yet been resolved.

In this study, I conducted a comprehensive survey of the research on Kappeta-Ori and clarified from what perspectives it has been studied thus far. In addition, I evaluated the effectiveness of "Kappeta-Ori" as a basic material for reproducing and weaving Kappeta-Ori, as well as its effectiveness as a technical material.

As a result, the previous studies could be divided into four categories. In particular, the research was divided into the perspective of the dyeing and weaving culture of Hachijojima Island, the perspective of folk tools and folklore research on looms and loom tools, the perspective of weaving technique research, and the perspective of cultural assets research for tourism and regional development. Furthermore, it was confirmed that none of the records said to have been created by the Commission for Protection of Cultural Properties were cited, referenced, or examined in any of the existing studies. It was also confirmed that the integration of research results from various fields is essential for the successful preservation and inheritance of Kappeta-Ori weaving techniques.